

- ① 未来、子どもを望むがん患者さんのために
がん・生殖医療相談外来を開設しました。
・新任のご挨拶
 - ② 名大病院臨床研修医のご紹介
・教えて！この言葉「ケロイドと肥厚性
癬痕（ひこうせいはんこん）」
・退職のご挨拶
- ・診療科レポート「血液内科」
 - ・ナディック通信
 - ・特定基金 医学部附属病院支援事業へ
のご協力をお願い
 - ・かわらばん HPのご案内

名古屋大学医学部附属病院

理念 ● 診療・教育・研究を通じて社会に貢献します。

基本方針 ● 1. 安全かつ最高水準の医療を提供します。 2. 優れた医療人を養成します。
3. 次代を担う新しい医療を開拓します。 4. 地域と社会に貢献します。

〒466-8560 名古屋市長和区鶴舞町65番地 TEL 052-741-2111 (代表)

<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/>

ホームページで「かわらばん」のバックナンバーをご覧いただけます

TOPICS ① 未来、子どもを望むがん患者さんのために がん・生殖医療相談外来を開設しました。



2021年1月、名大病院は、がん・生殖医療相談外来を開設しました。

未来、子どもを持ちたいと考える当院や地域のがん患者さんのために、さまざまな情報を提供し治療方法の相談に応じています。

生殖医療の専門医である産科婦人科の後藤真紀准教授にお話を伺いました。



がん克服後の人生を視野に、
生殖医療を考える。

近年、医療の急速な進歩により、がんは治る時代となってきました。治療後の生活の質にも目が向けられ、若年のがん患者さんでは、がん克服後に結婚し子どもを望む人も増えています。ただ、がん治療の影響で、性別問わず生殖機能や妊下したりすることがあるため、がん・生殖医療の重要性が高まりつつあります。当院は小児やAYA世代（15歳～39歳）のがん患者さんが多いため、以前から産科婦人科の一般外来でがん・生殖医療の相談を受け付け、妊よう性温存治療（卵子凍結保存・卵巣組織凍結保存・精子凍結保存など）を提供してきました。しかし、患者さんの妊よう性は年齢や治療薬の内容などによってお一人おひとり異なる上、生殖医療にはさまざまな選択肢があり、患者さんの判断を助ける妊よう性的な確かな評価や情報を提供するには十分な時間が必要です。そこで、新たにがん・生殖医療相談外来を設け、専門医を中心に相談に応じています。

正確な情報のもと、
納得のいく決断をご自身で。

当外来では、がん治療医と連携しがん治療を最優先に、患者さんの想いを尊重しながら今後の方針をご一緒に検討していきます。もし生殖医療を望まれるのであれば、がん治療の前が最善のタイミングですが、がん治療のスピードが求められる場合は、治療中、治療後など、その時点での卵巣・精巣機能を評価した上で検討します。

もちろん、生殖機能を温存しないのも選択の一つです。ただ、情報を知った上でご自身が決めるのと、後から知らされるのでは、結果の捉え方が違ってきます。患者さんに正確な情報を提供し、生殖医療や温存方法をご自身が理解した上で納得できる選択をしていただく一助となるのが当外来の役割です。

がん治療医と情報共有し、
患者さんを支えていく。

これまで当外来にご相談にいられた患者さんは、小学生から40代までと世代は幅広く、小中学生の患者さんの場合はご家族がいらついたり、地域の他病院の患者さんも来院されています。ただ、まだAYA世代のがん患者さんに妊よう性温存の情報が十分には広まっておらず、今後、がん・生殖医療が普及するに、がん治療医をはじめ、がん治療に関わるすべての医療者と情報共有することが重要です。そこで、愛知県では当院を中心に、がん治療を行う医療機関と生殖医療を行う医療機関を結ぶネットワークを形成し、がん患者さんをサポートしようとしています。当外来は、県内の患者さんやがん治療医の先生に開かれた窓口として、最新情報の提供に努めていきます。ぜひ、お気軽にご相談ください。

新任のご挨拶

産科婦人科長／教授 梶山 広明

この度、令和2年11月16日付で名古屋大学医学部附属病院産科婦人科長／教授を拝命いたしました。紙面をお借りしてご挨拶申し上げます。

産科婦人科は周産期、婦人科腫瘍、生殖内分泌、そして女性医学からなる非常に幅広い領域で、あらゆる世代の女性を包括的に支える診療科です。すべての女性への継続的な奉仕と産まれる赤ちゃんの健康向上に資する診療活動を第一に、引き続き最先端



の医療、教育、研究を実践して参りたいと考えております。今後ともご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

脳神経外科長／教授 齋藤 竜太

この度、令和2年12月16日付で名古屋大学医学部附属病院脳神経外科長／教授を拝命いたしました。紙面をお借りしてご挨拶申し上げます。

当科は、中枢神経系に発生する疾患を扱う診療科です。脳血管障害、脳腫瘍、てんかんなどの機能的疾患、脊髄・脊椎疾患など幅広い疾患を対象とした分野です。また、中枢神経疾患に関しては、小児から成人まで治療を担当します。それぞれの疾患に対応した最適かつ



安全な医療を提供できるよう診療科を挙げて取り組んでいきます。今後ともご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

特集 TOPICS **2**

名大病院臨床研修医のご紹介

名大病院では現在、医科歯科合わせて38名の研修医が医師としての道を歩み始めています。本シリーズでは隔回掲載で、医師を目指して日々取り組む研修医の、フレッシュな意気込みをご紹介します。

青木 里菜 (医科研修医)

私は現在外科系集中治療室で研修しています。担当する患者さんの状態や検査結果に応じ、上級医の先生方の指導の下、診療をしております。研修を通して患者さん、看護師さん、技師さん、上級医の先生方に支えられながら、日々の診療で学ばせていただいています。まだまだ未熟ですが、これからも努力して、自分も支える側の立場になれるよう診療に励みます。

尾関 咲耶子 (医科研修医)

私は現在、主に内科で研修をしています。毎日患者さんの診察をし、上級医の先生と相談しながら検査や治療方針を決める、超音波検査や腹水穿刺(せんし)を実際に自分で行う、等しています。大学病院は市中病院から紹介された患者さんがほとんどで複雑な病態の方が多く、沢山の事を学ばせていただいています。1日でも早く一人前の医師になれるよう日々勉強を続けていきたいです。

寺澤 毅彦 (医科研修医)

私は今、総合診療科で研修を受けています。この科で、主に病気の原因が判明しない患者さんを診ています。患者さんに寄り添って診察することが最も大切な科だと考え、研鑽を積んでいます。救急外来での研修で、患者さんが立て続けに搬送され、待たなしの状況の時に看護師さんに「先生しっかり！オーダーするのは先生ですよ！」と言われたことは、深く印象に残っております。まだ力及ばず周りの方々に助けをいただいておりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

大須賀 勇樹 (歯科研修医)

私は口腔外科外来にて、初診対応や、外来・入院患者さんの歯科治療を行っております。他科で入院中の患者さんには、虫歯が進行して歯が痛くなってしまう、化学療法前での口の中に感染源がある場合に治療を行うことで、主科の治療に専念していただくようにしております。大学病院ならではの貴重な症例に携われるため、大変勉強になる一方、自身の勉強不足・非力さを日々痛感しています。しかし口腔外科の他に、麻酔科や救急などの研修を通してより深い理解、学習ができ、毎日新しい発見があります。いつか患者さんに「先生に出会えてよかった」と言ってもらえるように努力します。



※医科研修医の診療科は執筆当時

教えて! この言葉

やけどの跡や、傷跡、手術の跡がケロイドになったと言って形成外科を受診される患者さんが多くいます。しかし、多くはケロイドではなく、肥厚性癬痕と呼ばれるものです。一般的にはケロイドの方が理解されやすく、私たちも患者さんに説明する場合にはケロイドと伝える場合もありますが、この二つは大きく異なります。肥厚性癬痕の多くは手術により目立たなくすることができますが、ケロイドは手術をしても再発することが多く、さらにはより大きくなることもあります。見た目は赤く隆起していて、組織学的にもほとんど区別がつかいません。両者を見分けるには、臨床症状しかなく、もともとあった傷の上でできるのが肥厚性癬痕で、その傷を超えて正常の皮膚へ浸潤しながら自立的に増大を続けるのがケロイドです。ケロイドの好発部位は前胸部、肩、耳介、恥骨部、下顎部などで、自身

ひこうせいはんこん ケロイドと肥厚性癬痕

形成外科長 亀井 譲

で気づかないような傷から発生することもまれではありません。比べて肥厚性癬痕は、大きなけがや手術によって生じることが多く、癬痕部への持続的な刺激が大きな原因といわれております。ケロイドと誤っている患者さんの多くが肥厚性癬痕で、発生部位にもよりますが、適切な治療を受けることで目立たなくすることができます。

癬痕・ケロイド治療研究会 (2018). ケロイド・肥厚性癬痕 診断・治療指針 2018



典型的な肥厚性癬痕 中間的病変 典型的なケロイド

退職のご挨拶

放射線科/病院教授 伊藤 善之

今年3月末をもって名古屋大学を退職いたします。放射線治療部門は私が帰局した2002年には治療に関わるスタッフは少なく、放射線治療のニーズにお応えするには困難な状況にありましたが、文科省の「がんブロー」事業による国の後押しもあり、名古屋大学に放射線治療の教育拠点と高度な放射線治療による診療体制の整備を推進することができました。また、大学病院の幹部の方々のご英断により、中央診療棟Bの地下1階には高精度放射線治療に特化した機器の導入と最先端の治療計画用のCT/MRIを設置することができました。多くの職種の方々のご支援とご協力に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

診療科レポート「血液内科」

血液内科 講師 島田 和之

血液内科は、文字通り血液に関することを扱う診療科です。血液には、体に必要な酸素や栄養素を運搬する作用、体液の量や電解質のバランスを調節する作用、体を異物から守ったり(免疫)、体が傷ついた際に血を固まらせたりする作用(凝固)の3つの大きな働きがあります。血液に含まれる赤血球・白血球・血小板や血漿(けっしよ)と呼ばれる血液の成分が、これらの3つの役割を担っています。血液の役割が正常に機能しなくなった時に、血液の病気がなります。血液内科が扱う主な病気として、白血球の病気(白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの血液のがん)があります。血液のがんになると、免疫の機能を司る白血球の働きが損なわれ、体の抵抗力が下がります。がん剤を用いますが、特に強い

抗がん剤治療を行う急性白血球や骨髄移植などの治療では、無菌室に入室して治療を行います。当院では、昨年血液内科病棟を改修し、19床の無菌室を使用しながら診療を行っています。また、当院血液内科では、血液凝固に関する病気の診療にも力を注いでいます。血液凝固に関する病気の診療は、凝固に関係する血液の成分が十分な機能を発揮するように継続的に行う必要があります。当院輸血部や関連する診療科のスタッフと共同して診療に当たっています。血液の病気に対する治療は日進月歩です。ご不明な点がございましたらお気軽にご相談ください。



Nagoya Disease Information Center ナディック通信

ナディックの利用休止について
患者情報センター(広場ナディック)は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため利用を引き続き休止しています。それに伴い、毎月開催してまいりました教室(手作り、ちぎり絵、折り紙)は当面の間休止。患者の集い、認知症サロンなどの患者さん向けのイベントについても次回の開催予定は未定です。肝臓病教室については2021年1月から期間限定でオンライン(動画配信)で再開する事になりましたので、詳しくは病院もしくは肝疾患診療連携拠点病院のホームページ(<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/kyoten/liver/>)でご確認下さい。がん患者さん向けの「ウィッグ・頭皮ケア相談」については外来棟1階「地域連携・患者相談センター」にてがん相談員が随時対応しております。(問い合わせ先 地域連携・患者相談センター 052-744-2663)

特定基金 医学部附属病院支援事業へのご協力をお願い

当院では本事業を通じて、診療環境の充実、患者さんへのサービスのさらなる向上、先進的な臨床研究の推進を進めてまいります。皆さまのご支援を賜りますようお願い申し上げます。詳細は、ホームページまたは外来棟各階に置かれているパンフレットをご覧ください。URL: <https://www.med.nagoya-u.ac.jp/kikin/hosp-kikin/>

QRコードでもアクセスできます!

